

道心



禅昌寺通信「道心」第31号

編集 日光山 禅昌寺「道心」編集室
発行 平成20年10月21日
〒732-0002 広島市東区戸坂山根3-2-7
☎082-229-0618 ☎082-229-0822
E-mail: zenshoji@bronze.ocn.ne.jp
ホームページ http://www.zenshoji.org/

理想の具現

禅昌寺住職 横山 正賢

修証義第三章 受戒入位

第十一節

次には深く仏法僧の三宝を敬い奉るべし、生を易へ身を易へても、三宝を供養し敬い奉らんことを願ふべし、西天東土仏祖正伝する所は恭敬仏法僧なり

聖徳太子十七条憲法第二条に「篤く三宝を敬へ」

三宝とは佛・法・僧なり。則ち四生の終帰、萬国の極宗なり。何の世、何の人か、是の法を貴ばざる。人尤だ悪しきもの鮮し、能く教ふれば従ふ。其れ三宝に帰らんずんば、何を以てか枉れるを直さむ。

とあることは、皆様へご承知の事と存じます。仏は大帥なるが故に帰依す。法は良薬なるが故に帰依す。僧は勝友なるが故に帰依す。と第十三節に述べられてあります。

仏とは絶対無比の真理を言うのであります。之を覚り、仏としての生涯を貫かれたのが本師お釈迦様であり世に真理の

道理を説き示されました。

法はその真理の道理を説かれた教えを申すのであり。煩惱の汚泥にまみれ苦しむ衆生の覚醒を教示する、良薬なるが故に帰依すると言われます。

僧は勝友なるが故に帰依す、とありますように、僧とは僧伽と言って、仏を崇め法を拠り所とする衆生の集団を言うのです。因みに、僧侶の使命はこの僧伽の形成を図り導師を担う事でありませぬ。

お寺は僧伽のシンボルであり実践の場ではなくてはなりません。

この節に言われる「生を易へ身を易へても」と言われることは、生まれかわり死にかわりしても、何れの時代になろうとも、富めるときも貧しいときも、いかなる境遇にあろうとも、何れの民族・社会にあろうとも、三宝を供養し敬い奉ることを、疎かにしてはならないことを強調されています。

「西天東土仏祖正伝する所は恭敬仏法僧なり」インド中国日本へとお釈迦様から歴代の祖師へと正しく伝承された仏法とは、恭敬仏法僧に他ならない。

前節までの懺悔によつて正真の自己に目覚めたところで「次には深く仏法僧の三宝を敬い奉るべし」と具体的に信仰の有り様をお示し下さっています。

仏とは固有の姿形をしているものではありません。仏像というものは人間が説

から想像して偶像化したものであって、仏の実像ではありません。

仏とは森羅万象ごとく存在するがまま、あらゆるものともいえますし、私は、己を生かしている自然の営みを仏の御命といただいております。

宇宙の真理の営みの一姿が私という個体をなしているのです。人間としての生涯が終われば四大は分離して大自然に霧散しますから仏に還るといふわけです。

人間はこのように仏の慈悲に活かされていると言うことに気づきますと、空なるものに手を合わし礼拝することが難しく、仏の偶像を作り出したのです。ですから仏像を偶像だからといって粗末にすることは出来ません。

法は良薬なるが故に帰依し奉る。真理の道理を説かれたものであり。人間の迷いや苦悩を癒し自己の本性に覚醒を促すものを佛典とか聖典と申します。仏教徒であれば、この教えを拠り所として生きなければ、真実を見失い真の自己に出会えないまま一生を終る事になります。

僧は勝友なるが故に帰依し奉る。僧伽に集う諸人は勝友であります。共に助け合い和合して活かされ合つ姿こそ、仏教徒のあるべき姿です。

三宝に帰依すると言うことは人間の生き方の基本を正すと言うことにもなりませぬ。

青山老師の 講座に参じて

禅昌寺 道心会 道菅 通博



先日は、禅昌寺で開催された定例（年二回、春・秋）の青山老師による禅語録の講座に参じ、教えを乞う機会を得ました。

禅の語録、すなわち、中国の祖師方が喩えを用いて説いておられる釈尊の教えは、漢文であるとともに比喩が時代がかっており、現在の我々がかじつてみてもなかなか飲み込めないものであります。これを老師が身近な体験と平明

な言葉で噛み砕いて落とし込んでくださり、仏教に暗い私も、還暦間際の我が思いと重ねつつ、反省を混じえて領きながら聞かせていただきました。自分の身の丈ほどの独善的理解で、いささかおぼつかないのではあります。

私事から述べさせていただきますが、私が禅昌寺に吹禅（すいぜん・普化尺八の献奏）に伺い始めてから、かれこれ三十年に届こうとしております。最近では週日の早朝、一炷の坐禅の後、一炷の吹禅を行じさせていただいております。

皆さんから、「よく続きますね」と感心されませんが、私としては、続けること自体にはさほど困難は感じておりません。今日はやりたいからやる、今日はやりたくないからやらないといった計らいを捨て、ひたすら平坦として吹禅に身をゆだねております。一管の竹に牽かれての人生でありましょうか。

静坐と深い呼吸によって心身が賦活され、とても落着いた気持ちになり、リセット効果は抜群であります。早朝の山寺の空気も、そうさせるのでしようか。

また、打ち込めば打ち込むほど、自分の獲得したレベルに応じて新しい世界が開き、より高い次元を目指して励むのがとても愉しくなります。

ただし、「継続は力なり」とは申しませんが、継続は必ずといってよいほどマンネリ化を伴い、マンネリ化した修行は独善と慢心に陥り、かえって向上の妨げとなります。いかに求道心・向上心を維持したまま継続するかが課題であります。良師、勝友（良きライバル）と交わるのが最良の薬かと、おぼろげながら思うのであります。

老師は常々、人は自分の度量に応じてしか世

界を理解することは出来ない、理解できたと思っても「知は盲覚」、自分の度量の程度に理解できたのみであり、慢心に陥ってかえって人生に躓くとおっしゃる。

さりとて、向上を得るためには理解する努力はしなければならぬ。一切衆生悉有仏性、いのちあるものはすべて仏性そのものであるといえ、問いかけて求めることなしにこの単純事実、あたりまえのことを受け止め味わうことは出来ない。風は空気の動きであり、空気はどこにでも存在する、しかし、団扇を使うことなしに風を味わうことは出来ないように。

そこで、独善と慢心に陥ることなく理解を深めるためには、問いかけて問いかけて、悟りを得たら悟りを捨て、常に否定を繰り返しながら自らの度量を拡大していくという、謙虚な努力を重ねる必要があるとおっしゃる。

彼岸という状態（ストック）もさることながら、彼岸へ向かう流れ（フロー）を大切にしながら、ということでしょうか。

また老師は、悲しみや苦しみがアンテナとなり、良き師にめぐり合うことにより闇を光に転ずる、あるいは泥土に蓮華を咲かせることが出来る、と説かれる。良き師とは、彼岸の方向さえ分らない私たちを、それぞれに応じた巧みな方便を用いて導いてくれる案内者であり、よほどアンテナを張り巡らさなければ（一途に求めなければ）めぐり合えないかと思われまふ。

人生は行為（業）により運命（旧業）を転じていくことであると思いますが、良き教えと善き行いにより闇を光に転じていくのが仏道でありましょうか。

私は、これまでは光の中を歩み、幸せ過ぎてアンテナが張れず、仏縁とは程遠い人生を送っ

勝友の庭

てきました。しかし、もうじき還暦、老師の言われる通りこれからの人生、二度目の旅は否応なしに老・病・死を見据えての展開となりましょう。これこそ釈尊の教えの眼目、これらはすでに釈尊により悟り取られていることに心を強くし、益々聞法に励むとともに大いに学んで、光を闇に転ずることなく、闇が来ればそれを光に転じて、味わ

い深い人生を歩みたいものです。

とはいえ、やはり二度目の旅も平凡な日常の繰り返し、坦坦とした当たり前の日々が続くのみ。老師によれば、仏教とは日常茶飯事のことにごどう身を処すかの教えとのこと。一期一会の客人とお茶をいただくという日常行為に深い精神性を与えて茶道にまで高めた、あるいは一管の竹に息を吹

き込むことを吹禅にまで高めた先人達の伝統に倣い、着衣喫飯日常茶飯事の中に深い精神性を盛り込んだ人生が送れればと思います。

この度は、青山老師の講座に参じ、教えを乞うことが出来たことに感謝いたしますとともに、次回の講座は、より大きな度量で受け止めることが出来るよう努力いたしたいと存じます。

私が住職をして数年のことです。お檀家さんでこんなやりとりがありました。この話の背景は、私がまだ二十九才の頃、六十七才でさんざん妻子供達に苦勞を掛けて逝つた男の四十九日迄の七日七日ごとのお参りの間の未亡人との話です。

「おっさん(和尚のこと)お父さんが毎晩夢枕にでるんじゃないかと思う」一瞬どきつとしたこととです。住職に就任して四年ほどのことでした。まだ葬儀の導師を数件しかこなしてない、私の葬儀の所作がおぼつかなく見えたのでしよう。

しばらくの沈黙の後「おばあちゃん、あなたのお父さんと何年連れ添うとつたんねえ」「そうよの、四十二年連れ添うとつた!」「それじゃ聞けど、おばあちゃん、あなたが先に逝つて四十年も連れ添うて残してきた、ご主人が夢にも見てくれなかったとしたら、あなたどう「ね」少し時間をおいて「そりゃやっぱり、さみしいの」

それ以来私は自身にも弟子達にも業者の方々にも、葬儀を司るものは、とかく慣れがちであ

るが、死者にとつては終焉の一度きりの儀式だから、けつして疎かにならないように特に注意を払うよう促しております。

就任以来四十五年の間五百数十人の葬儀を司つておりますが、そのうち菩提寺の住職として、死んでゆく人と胸襟を開いた交わりがあつた人は如何ほどかと数えてみると、百人にも満たないように思い寂しいものがあります。

私は菩提寺の住職として大事にされるよりも、人間らしく喜怒哀楽を共にし、互いが活かされ、癒される場としての寺でありたいと願っております。

先日 夫が急逝しました、遺書の中に葬儀は「禅昌寺さんで」とあるので宜しく、という電話があり、依頼されるままに枕経を勤めに参り、伺つてみると昨年春頃来山され、自分の家は曹洞宗だから将来この寺の檀家にしてほしいというような、お話をしてお別れしたことを思い出したのではありませんが、この方は事業が行きづまり、自害されたのでした。葬儀は禅昌寺にと書き残しながら、生きておられる間の悩みや苦しみを打ち明けることもなく逝かれたことを残念に思います。

八月のこと、お檀家のお爺ちゃんが八三才で亡くなりました。このお爺ちゃんの葬儀がなけ

れば合うこともなかった、その家の還暦前後の娘さんが、腰のヘルニヤがひどくて歩行が困難で入院されていると、お盆が過ぎれば手術をされると聞き、私のもっている情報で、手術をする前に一度試してみてもと「某鍼灸院の鍼とニク灸」をお勧めしました。その方は病院から鍼灸院へ通われて、二回の施術で歩かれるようになり、手術をする必要もなくなり整形外科医を退院されました。鍼灸の施術を施していた事を知らない医師は、患者の快復ぶりを不思議な思いで見送つたことでしょう。

私は自身の身体がダメージを受けて医者に掛かったり、治療院のお世話になつたことはありませんが。医者にも治療院にも名医と言われる情報を元に、常に身体のメンテナンスの為に世話になつておりますから、此処にご紹介をした重傷の方に、その名医の方をご紹介し、「お陰様で救われました」の一言を戴き、何よりも「勝友」の存在感を味わう嬉しい出来事でした。

このような感動は何度も味わつておりますが、苦悩の多い人生共に支え活かしあつてゆく源が「勝友の庭」貴方もその一員です。

禅昌寺は何時も門を開いて皆様のお越しをお待ちしております。

禅昌寺方丈

◆道心・趣味の会◆

短歌

● くれなゐの帯を引くように夕映えは
太田川のむこう細く移ろう

● 一片の白雲もなき午後空
東にははや薄月浮かぶ

東区 矢野 淑子

俳句

● 秋風や身の浮くやうに透くやうに

● 虫時雨 星は瞬き かえすなり

● うろこ雲空いつばいの 大漁かな

廿日市市 伊藤 順二郎

● 老菊師 姫の頭を 無造作に

● 大花野 行けばわれ待つ 人あらん

● 身に怱むや 座禅終止の 鐘の音

東区 青笹 俊枝

● 父母逝きて はらから淡し 盆の月

● ひたすらに 生きて嫌らはる 灸花

● 秋風や ふと口づさむ 伊呂波歌

東区 河野 貞女

◆行事報告◆(七月～九月)

●お盆前諸堂掃除

七月二十七日(日)

多くの皆さんにご参加いただきました

盆を迎える準備が整いました。大変ありがとうございました。

●彼孟蘭盆会法要

八月六日(水)

百五十名余のご参加で法要を営なれました。

方丈の法話は曾ない、名調子の楽しい法話を拝聴しました。

●青山俊董老師講演会

九月三十日(火)

午前の部・午後の部共に五十名余の皆さんが難しいお話を噛で含めるようにお話しいただき爽やかで実のある一時を過ごさせていただきました。

以上行事報告編集子

●「Tsukiminoji」演奏会

十月四日(土)

第八回ジョイントコンサート、クラリネット武田忠善先生・フルート大代啓二先生・ピアノ天野圭子先生でした。三百数十名の聴衆が奏でられた名曲に魅了しました。



◆行事案内◆(十二月～土月)

●檀信徒交流「出雲路とカニ料理の旅」

十一月十六日(日)

行き先 出雲大社・一畑薬師・松江観光・昼食は玉造温泉にてカニ料理

●参加費 一万円

(参加希望者は電話にてお寺までお申し込み下さい)

定員四十五名になり次第締め切ります。後五～七名余裕があります

お友達を誘ってご参加下さい。

●お正月前諸堂大掃除

十二月七日(日) 午後一時～三時まで

(終了後希望者により忘年会、会費千円・例年カラオケ有り、無礼講の楽しい集いとなっています)

●臘八撰心坐禅会

十二月一日～八日(朝まで) 午前六時より一炷・午後七時より二炷

(年内の坐禅会は八日の撰心終了をもってお休みします。)



三百数十名の聴衆で賑わったコンサート

●新春坐禅会

平成二十年元旦 午前八時より

●新年のご祈禱法要

平成二十年元旦 午前十時より

檀信徒皆様の一年のご無事を祈願する法要です。お参りされた方にお札を差し上げます。

(古いお札をご持参下さい。)

※お寺の寺務は正月五日より通常に戻ります。

■毎月定例行事

●上田宗箇流茶道稽古日

毎月一回 第二又は第四金曜日の予定 午後一時から

※お抹茶と和菓子を楽しみつつも、りでご参加下さい。

●御詠歌の会

第二金曜日午前十時より自主練習 第四金曜日午前九時より講師を招いて練習 昼まで

※茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講師の都合により変更する場合があります。初めて参加される方は、お寺に電話にてご確認下さい。

●西国三十三箇所巡礼

西国三十三箇所のバスツアーを企画しております。参加ご希望の方は、お寺までご連絡下さい。

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣味の短歌俳句など何でも結構です。お寄せ下さい。